

## 台湾との交流、昔と今

(公財)交流協会台北事務所 副代表 佐味 祐介

初めて台湾を訪れたのは20年前、40年間に及ぶ戒厳令が解かれて5年、日本人訪台者が年間5～60万人から8～90万人に「底上げ」した頃だった。

日台間の貿易では1970年代後半以降、台湾側の貿易赤字が急拡大していたが、その一方、1980年にスタートした「新竹科学工業園区（サイエンスパーク）」を中心に台湾の電子産業が急速に発展し、日本からの資本、技術、製造設備や材料の導入も進み、今から考えれば、現在に至る日台の相互補完による産業アライアンスの原型が形作られた時期でもあった。

日本における台湾の観光情報は、今とは比較にならないほど少なく、故宮博物院のほかは、「マル公園」（重慶北路と南京西路の交差するあたりにあった屋台街）での夜の食べ歩き、そして足裏マッサージくらいの「お勧め情報」しかなかったと記憶している。気ままな一人旅とて、これら「必須科目」をこなした後は、「ニイハオ」と「シェシェ」だけの語彙で、まずは地元客しか来ないと思しき場末のスナックにエイヤッと飛び込む。とりあえずテレサテンを歌ってみて、反応してくれた台湾人の先客達と筆談を交え交流を試みた。2泊3日の弾丸旅行の最終日、たまたま乗ったタクシー運転手に台湾土産を尋ねたところ、彼の家業の茶葉店に連れて行かれた。幾種類もの台湾茶を振る舞ってくれた老主人（恐らく運転手氏の父親）から、やや唐突に「昔は日本だよ、その頃自分も日本人。だから、故郷だと思ってまた来なさい。」と日本語で語りかけられ、その意味を深く考えることなく、単純に感激した。

時は流れて、今、「日中国交正常化」から40年。

あの台湾は、20年前には想像もできなかった変貌を遂げた。目覚ましい産業と経済の成長を実現し、一人当たりGNPも2万米ドルを超え、世界有数の外貨準備を誇るまでになった。同時に、ユニークかつ劇的な民主化プロセスを辿り2回の政権交代を経て、他方でAPECやWTOにも加盟するなど、国際空間の中でも独自の地位を築き上げてきた。卓抜した起業家精神とスピーディな経営判断、高度な生産管理技術と中華圏ネットワークを活用し、日本との貿易赤字を補って余りある欧米市場からの貿易黒字を大陸経由で稼ぎ出す成長モデル。そして今や、ブランドや技術開発力さえも自前のものとし、今年前半では台湾からの対日投資額が日本の対台投資額を上回ったことに象徴されるように、日本企業への投資や能動的提携による新たな日台提携モデルさえ、今や本格化しつつあるように見える。

今回この1年、自分にとっても、台湾との交流は、旅ではなく暮らしになり、仕事になった。改めて、台湾の現在・過去・未来とその中にある日本についての理解を日々深めることの大切さと困難さを実感している。週に2回の中文の個人授業で四声の間違えをしつこく直され、語彙も20年前よりは多少増えたものの、果たして、その分深くて広い「交流」ができているのか。

東日本大震災・原発事故や欧州危機などによる大転換、世界的な「政治の季節」の訪れなどで、これまでの延長線上に将来像が見えない状況ではあるが、台湾の経済関連の各当局、日・台の実業界との議論や協働を愚直に積み重ねていけば、少しずつでも必ず、明日の台湾、明日の日台関係が見えてくる、と信じたい。